

まえがき

本書、『七仙人の名乗り——インド叙事詩『マハーバーラタ』「教説の巻」の研究——』は、北海道大学大学院文学研究科に受理され、それによって2015年3月25日に博士（文学）の学位を授与された博士論文、「サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』第13巻の文学研究」を改稿したものである。

この博士論文の審査は、2015年2月8日（日）午後1時から3時過ぎまで行なわれた。審査委員となっていたいただき、二時間以上に渡る試問を行なって下さった、北海道大学大学院文学研究科の細田典明先生（主査）、林寺正俊先生、鈴木幸人先生に心よりの感謝を申し上げる。

また、本書の第2章から第6章に『マハーバーラタ』第13巻の幾つかの章の和訳を収めているが、本書の改稿作業の途上、2016年の秋から冬にかけて、北海道大学の先輩・谷川靖郎氏に拙訳の校閲をお願いした。厚く感謝を申し上げる。

本書の基になった博士論文は、十三の公刊論文を修正・加筆した原稿と、二つの書き下ろし原稿（「序章」「終章」）から成っているが、本書では二回の学会・研究会口頭発表原稿を追加し、さらに全体として改訂を行なっている。各論文や発表原稿間の記述を相当量移動させてもいるため、多くの場合、もとの姿とは変わっている。十三の公刊論文の情報を、今ここに簡潔に記せば次の通りである。

- ・北海道印度哲学仏教学会において口頭発表をした後論文執筆をして、同学会の学会誌『印度哲学仏教学』に掲載を認められた四論文（査読付き）。
- ・日本印度学仏教学会において口頭発表をした後論文執筆をして、同学会の学会誌『印度学仏教学研究』に掲載を認められた三論文（査読付き）。
- ・小樽商科大学の学内誌『小樽商科大学人文研究』に掲載された六論文。

また、発表原稿とは次の通りである。

- ・第5回ヴェーダ文献研究会（於国際仏教学大学院大学、2015年10月31日（土）において口頭発表をした原稿（発表題目「七仙人の名乗り」と「ガウタマ仙の象」は『マハーバーラタ』批判版でどうなるか））。
- ・インド思想史学会・第22回学術大会（於京都大学・楽友会館、2015年12月19日（土）において口頭発表をした原稿（発表題目「語り物『マハーバーラタ』の構想・技巧・異伝——「七仙人の名乗り」を例として——））。

以上のうち、十三の公刊論文の情報については本書の「文献一覧」に記載している（なお、これに限らず、本書の脚注に挙げている論文・著書の情報はなるべく簡略に記し、「文献一覧」において詳しい情報を記している）。

この博士論文を書き上げるために、また、これを改稿して本書を成すまでに、上に挙げた方々以外の多くの方々からも援助を受けていることを記し、感謝の念を申し上げたい（個別の謝辞は各節の末、および脚注に記している）。

本書の著者は、もともと日本の古典文学を専攻し、それによって学位を、そして職を得た者である。この国文学時代の師匠の方々、松前健先生、福田晃先生、高橋伸幸先生に、この場を借りて御礼を申し上げる。私の場合、研究の基礎として国文学があることに間違いはない。国文学時代に、文学の民俗学的研究手法を知り、諸言語の古典や口承文芸に対する興味を育てられた。

そして、1993年5月からほぼ二年、京都大学の梵文学研究室において門外漢の私をサンスクリット学習へ導いて下さった小林信彦先生に、御礼を申し上げる。あまりにも限られた経験であり、専門的なことを学ぶには遠く及ばなかったのには無念の思いがある。小林先生が日常会話の中で示された言語感覚には自分のそれと通ずるものがあつたと、最近感じはじめています。

1995年3月末、職に就くため小樽に移住したが、その後、北海道大学のインド哲学講座と北海道印度哲学仏教会会とに受け入れていただいた。抛り所のない私に抛り所を作って下さった北海道大学の先生方、藤田宏達先生、今西順吉先生、藤井教公先生、細田典明先生、吉水清孝先生、林寺正俊先生に、御礼を申し上げる。

職に就いて四年が過ぎた後、1999年3月から2001年3月の二年間、オックス

目次

まえがき	iii
序章	3
第1章 『マハーバーラタ』第13巻「教説の巻」の研究	23
はじめに	25
第1節 ユディシティラとビーシュマの対話(1) ——「教説の巻」「布施の法」の構想——	27
第2節 ユディシティラとビーシュマの対話(2) ——「教説の巻」「布施の法」の全章構成表——	40
おわりに	62
第2章 『マハーバーラタ』第13巻第1章「蛇に咬まれた子供」の研究	65
はじめに	67
第1節 「蛇に咬まれた子供」の考察(1)——運命か行為か——	69
第2節 「蛇に咬まれた子供」の考察(2)——問答か真実語か——	80
第3節 「蛇に咬まれた子供」の和訳	93
おわりに	121
第3章 『マハーバーラタ』第13巻第5章「鸚鵡と森の王」の研究	125
はじめに	127
第1節 「鸚鵡と森の王」の考察——慈悲と敬愛の念——	129
第2節 「鸚鵡と森の王」の和訳	142
おわりに	152
第4章 『マハーバーラタ』第13巻第50章・第51章 「チャヴァナ仙と魚達」の研究	155
はじめに	157
第1節 「チャヴァナ仙と魚達」の考察——共に住む者への愛情——	159
第2節 「チャヴァナ仙と魚達」の和訳	170
おわりに	191

第5章 『マハーバーラタ』第13巻第93章「七仙人の名乗り」の研究	195
はじめに	197
第1節 「七仙人の名乗り」の考察(1)——言葉遊びと魔女退治——	200
第2節 「七仙人の名乗り」の考察(2)——言葉遊びはどう変わるか——	224
第3節 「七仙人の名乗り」の和訳	259
おわりに	293
第6章 『マハーバーラタ』第13巻第102章「ガウタマ仙の象」の研究	297
はじめに	299
第1節 「ガウタマ仙の象」の考察(1)——良き行ないと言祝ぎ——	301
第2節 「ガウタマ仙の象」の考察(2)——言祝ぎはどう変わるか——	315
第3節 「ガウタマ仙の象」の和訳	329
おわりに	352
終章	355
Summary	365
文献一覧	370

序 章

1. 『マハーバーラタ』の文学研究

『マハーバーラタ』(Mahābhārata)は、古代インド成立¹の、古典サンスクリットによって記された叙事詩である。自ら十萬偈から成るとも言う巨大な存在である。ヒンドゥー教の聖典としての性格を持つに留まらず、現在に至るまで愛好される文学作品である。従兄弟同志に当たるバラタ族のパーンダヴァ家とカウラヴァ家の兄弟が領土を巡って大戦争に至り、壮絶な結果に終わるといふ、史実²に基づくとされる核部分を中心に、長大な物語となつていったものである。この核部分が西洋古典の「叙事詩」(epic)にほぼ相当する。

そして、『マハーバーラタ』は、構造の点から言えば、世界的に見られる「枠物語」³の一つである。ときとして、枠となっている主筋のストーリーの進行を忘

1——E. W. Hopkinsは紀元前五世紀から紀元後五世紀の間に、M. Winternitzは紀元前四世紀から紀元後四世紀にかけて、現在の形にまで成長していったという。これらの説は現在もおおよそそのまま踏襲されている。

Hopkins, E. Washburn. 1901. *The Great Epic of India*: 386-402.

Winternitz, Mauriz. 1908. *Geschichte der Indischen Litteratur*, Bd.1: 389-403 (中野義照訳1965『叙事詩とブラーナ』(『インド文献史』第2巻、159-176頁)。

2——A. A. Macdonnelはこの事件の年代について、紀元前十世紀を下らないとしている。

Macdonnel, Arthur Anthony. 1900. *A History of Sanskrit Literature*: 239.

3——〈枠物語〉という語はそのような構造を取る作品全体を指すことも有り、そうした作品構造の中の「枠」部分を指すことも有る。構造全体としての(あるいはジャンルとしての)〈枠物語〉には、幾つかのパターンが有る。厳密に言えば、その構造は作品毎に大小の異なりが有る。そうした〈枠物語〉は『ジャータカ』『マハーバーラタ』等のインドの古典文学に起源するとされているが、現在世界的に有名な〈枠物語〉は、インド外で後代に成立した『デカメロン』『カンタベリー物語』、あるいはまた『アラビアン・ナイト』等であろうか。これら三作品の〈枠物語〉では、枠となる主筋の物語よりも嵌め込まれた物語・説話の比重が大きく、嵌め込まれた物語・説話の編集のために枠となる物語が

れさせるほど多くの、登場人物達が語る神話・説話や思想・宗教・教訓的言説も展開してゆく。このような「枠内物語」が存在することによって、「枠物語」が成立する。

また、『マハーバーラタ』は、一人の創作者に帰せられる作品ではなく、時代を越えて吟誦詩人達により語り継がれた後記録された、本来ほぼ無限の成長の可能性を有し、語り物としての性格を継承している文学作品である。本書では、『マハーバーラタ』の第13巻「教説の巻 (*Anuśāsanaparvan*)」⁴中の「布施の法」(*Dānadharmaparvan*)を研究対象とし、文学としての研究を行う。『マハーバーラタ』第13巻「教説の巻」「布施の法」は上記・主筋の物語(枠物語)に嵌め込まれた神話・説話(枠内物語)や教訓的言説の披露を専らとする巻である。

『マハーバーラタ』を研究対象とする主たる分野は、「インド学」あるいは(日本ではしばしば)「インド哲学」と呼ばれる。そこでは文献学的、基礎的研究が中心に行なわれる。『マハーバーラタ』が叙事詩研究⁵や神話研究において取り上

存在すると考えられる。インドの古典文学の中でも、『ジャータカ』は仏の語る「過去物語」が「現在物語」と「連結」に挟まれて、大きい比重を占める。この『ジャータカ』を典型例とする仏教経典のかなりのものもまた、〈枠物語〉であり、嵌め込まれた部分が重要であることが多い(ただし、仏典の場合も、枠の内と外との比重関係は様々である)。『マハーバーラタ』は以上の文学作品とは異なって、主筋の物語が中心であり、そこに奔流のように説話・教訓的言説が流入している形を取っている。このように、ストーリー性の無い宗教的・思想的、また教訓的言説が多いのも特徴である。それが、『マハーバーラタ』がヒンドゥー教の聖典的存在となる所以なのであろう。

4——John Brockingtonは『マハーバーラタ』の研究史を概説した著作の中で、第13巻が第12巻から11～13世紀に分離したとするVittore Pisaniの説を支持している。

Brockington, John. 1998. *The Sanskrit Epics*: 131, 153.

Pisani, Vittore. 1939. 'The Rise of the Mahābhārata.' *New Indian Antiquary*, Extra Series.

5——世界の叙事詩研究の潮流の中で、『マハーバーラタ』を全体として研究した

げられるときには非常に大局的に、あるいは何らかの理論に則して言及される。そのように『マハーバーラタ』を研究する最大・主要な研究分野は「インド学」「インド哲学」であるが、そこにおいては、思想・哲学・宗教あるいは言語の研究が主流である。歴史研究の希薄なことはよく言われているが、文学研究についても、思想・哲学・宗教研究ほど盛んに行なわれてはいない。本文校訂や翻訳の基礎的研究、古典文学理論（詩論・劇論）の研究、カーヴィヤ修辞文学の研究等は有るものの、『マハーバーラタ』のような作品の文学研究は独自に確立しているとは言えない。それでは、文学研究一般に、基礎的作業以外の、作品解釈のための確定した、多くの研究者が従う手法や理論が存在するのか、という問いに対して、「存在する」と解答することもおそらく出来ない。文学（特に古典文学）の場合には文学独自にして、かつ確立した理論や手法というものはほぼ無い。他分野から理論や手法を導入し、それに基づいて文学研究が行なわれる場合も有るが、多くの研究者の支持を得て長く続くということが起こりにくい⁶。したがって、文学研究においては、一人一人の研究者が過去の研究成果に学びつつ、仮のものであっても自ら体系を作り、纏めあげる努力を続けるしかないようである。おそらく文学研究は、現在でも個々の研究者の個性や感性に大きく任される、あるいは左右されるものである。インド学において文学研究が発達しにくいその原因の一つとしては、研究そのものが共有され、個々の研究成果が継承される傾向が強いインド学——その意味において社会科学系分野、場合によっては自然科学

ものは有り、また、『マハーバーラタ』の語りの定型句を口承文芸の叙事詩研究から適用して考察したP. A. Grintserの重要な研究も存在したようである（J.W. De Jongの紹介論文による。P. A. Grintser論文そのものは入手することが出来なかった）。

De Jong, J. W. 1975. 'Recent Russian Publications on the Indian Epic.' *The Adyar Library Bulletin*, 39: 1-42.

ドゥ・ヨング、塚本啓祥（訳）1986『インド文化研究史論集』95-146.

6——一例を挙げれば、他の多くの分野から影響を受け、十九世紀末からインド学の文学（説話）研究でも系統図を作成することが行なわれて来た。しかし、これも現在は大勢とは言えない。

中村 史 (Fumi Nakamura)

- 【略歴】1963年9月 京都市に生まれる
1986年3月 立命館大学文学部文学科（日本文学専攻）卒業
1994年3月 立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程（日本文学専攻）修了
2015年3月 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程（宗教学インド哲学講座）修了
- 1995年4月 小樽商科大学商学部助教授（2005年9月まで）
1999年3月 文部省在外研究員（若手枠）（2000年3月まで）
オックスフォード大学オリエンタルインスティテュート・アカデミックヴィジター
（Academic Visitor, Oriental Institute, The University of Oxford）（2001年3月まで）
2005年10月 小樽商科大学商学部教授（Professor, Otaru University of Commerce）（現在に至る）
- 【学位】1994年3月 博士（文学）（立命館大学）
2006年3月 博士（比較文化学・乙）（桃山学院大学）
2015年3月 博士（文学）（北海道大学）
- 【単著】『日本霊異記と唱導』（三弥井書店、1995年）
『三宝絵本生譚の原型と展開』（汲古書院、2008年）
- 【連絡先】〒047-8501 北海道小樽市緑3丁目5番21号 小樽商科大学 中村 史
Dr Fumi Nakamura
Otaru University of Commerce
3-5-21, Midori, Otaru, Hokkaido, 047-8501 JAPAN
- 【メールアドレス】n-fumi@res.otaru-uc.ac.jp

小樽商科大学研究叢書

七仙人の名乗り

インド叙事詩『マハーバーラタ』『教説の巻』の研究

2017年12月10日 初版第 1 刷印刷

2017年12月20日 初版第 1 刷発行

著 者 中村 史

発行所 国立大学法人小樽商科大学出版会
〒047-8501 北海道小樽市緑 3 丁目 5 番 21 号
tel. 0134 (27) 5210 fax. 0134 (27) 5275

発売元 論創社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル
tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232
<http://www.ronso.co.jp> 振替口座 00160-1-155266

装 幀 宗利淳一

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1660-9 ©2017 Fumi Nakamura, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えます。